

# 子供のユーモアに関する研究（その1）

奥 田 倫 子

## I は じ め に

1970年代の初期より、アメリカを中心としてユーモアの発達についての研究が注目を浴び、他の発達の分野との関わりにおいてさまざまな論争が行われてきた。それと共に、大人とは異なる、子供のユーモアの独自性というものが考察されるようになった。

Tamashiro (1979) は、子供たちが面白いと思っていることについて、大人は驚き、まごつき、時々腹をたてることが多いという。大人は子供のユーモアをどのように捉えがちなかについて、彼はあるクラスルームでのエピソードを取り上げた。「椅子に座っている子供が、悪戯で他の子供に椅子を引っ張られ滑り落ちた。これによって、他の子供たちは爆笑するが、教師はそれを面白いことと受け止めず、悪ふざけとみて、クラスの躾の問題として取りあげた」と。大人は子供たちが面白いと思うことに対して、必ずしも同じ思いを持つとは限らないし、また理解を示し寛容であるとは言えないようである。大人と子供とでは、何が面白いという認識が違っているのであろうか。大人の目からみた子供のユーモアは、どのように実際受け止められ、評価されているだろうか。これまでの研究者は、どのように子供と大人のユーモアの違いを示してきたであろうか。

1898年に Wissler は、子供は大人が面白いと思うものに対して反応を示さないことから、子供は真のユーモアのセンスを持たないとみなしたが、1921年には、Dunn は子供が認識するユーモアと大人が認識するユーモアとは、等しいものではないことを述べた (Jalongo, 1985 より孫引)。そして1970年代になって盛んに行われるようになってきた子供のユーモアの研究では、大人とは異なる子供のユーモアの独自性を捉え、子供の側にたって子供のユーモアを見つめることの大切さを示している (例えば、McGhee, 1979)。

ユーモアの発達の研究として日本において最初に発表されたものは、1985年に平井によって行われたもので、「ユーモアの発達（第一報）－幼児期におけるおどけ、ふざけの意義について－」である。この中で平井は、4歳前後より顕著に見られる幼児の「おどけ」「ふざけ」をユーモアの芽生えとして仮説をたてている。筆者はこのテーマに興味を抱いて以来、「子供にはユーモアがあるのだろうか、もしあるなら、何をもって子供のユーモアとするのだろうか」「いつごろから、ユーモアが芽生えてくるのだろうか」などの疑問点を持ち続けてきた。子供のユーモアを考えるにあたり、ユーモアとは何かについてまず考察してみたい。

ユーモアは、元来ラテン語「フモール (humor)」に語源のある、体液の意味を持つ語である。

## 奥 田 倫 子

古代、中世の医学では、このフモールには4つの主要なフモール、即ち血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁があり、それらの配合の具合によって、人の体質と気質が決定されていると信じられていた。この医学、生理学の術語が、ルネサンス時代にイタリアで文芸上に転用され、特異性、特殊性という意味をもつようになった。その後「フモール」は英国に入り、特異性という意味に解釈されたフモールの英語化である「ユーモア (humour)」が流行し、シェークスピア、ジョンソンらの作品を経ていった。その後、ユーモアという英語は、文学の世界のみならず文学以外の世界にも使用されるようになり、17世紀には人格的な滑稽として確立した。以後、ユーモアという語はたえず意味を拡大し、その定義づけは千差万別である (河盛、1969)。

一般的なユーモアの定義については、『Webster's 3rd New International Dictionary』では、「ばかばかしい、あるいは矛盾した考え、出来事、状況の性質」「滑稽さや可笑しさの性質」と書かれてあり、その性質を発見、表現、鑑賞する知的能力、あるいはその性質を示す行動、話、文書のことも定義に含んでいる。

日本では、ユーモアを1901年の坪内逍遙著の『英文学史』で「滑稽」と、1912年に永井荷風著『妄宅』で「可笑味」と、1919年チェーホフ著、秋庭俊彦訳『退屈な話』で「諧謔」と表してきた (角川外来語辞典)。ユーモアの定義づけとして、よく知られているものに、夏目漱石の『文学評論』と、矢野蜂人の『英文学の特性』のものが挙げられる。それらを紹介してみよう。

「ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味であるということになりはせぬかと思う。ほかの言葉でいうと、ヒューモアのある人の行為は、他から見ると可笑しいが、当人自身では他から可笑しがられるわけがないと思っている。彼は真面目である。無意識に可笑味を演じつゝある。もう一つ言い直すと、可笑味が当人の天性、持って生まれた木地から出る。したがって取って付けたように見えない。行雲流水のごとく自然である。」

(夏目漱石『文学評論』p.230-231.)

「ユーモアは、人生の馬鹿らしさ、をかしさに直面しながら、これを憎む事の出来ない場合に生ずる心状である。それは、人生の馬鹿らしさを馬鹿らしく感じない事でもなく、不合理を不合理と感じない事でもない。唯、それを、濫りに責めず憎まず、一種憐憫の情をさへ籠めて眺める心である。」

(矢野蜂人『英文学の特性』p.94.)

日本では、一般にユーモアをどのように定義づけているのだろうか。『岩波国語辞典』では、「人間生活ににじみ出る、おかしみ、上品なしゃれ。人生の矛盾、滑稽等を、人間共通の弱点として寛大な態度でながめ楽しむ気持」とされ、『角川外来語辞典』では、「上品なしゃれ、品のよいこっけい」とされ、『日本国語大辞典』では、「人を傷つけない上品なおかしみやしゃれ。知的ウィット」とされている。これらをまとめていくと、「上品さ」「寛大さ」「思いやり」等の要素で味つけされたおかしさ、しゃれであるように捉えられるが、一方ではユーモアを「おかしさ」「おかしさ

を楽しむ心」などと、広く意味を持たせて定義づける場合もあるようである（例えば、黒、1985）。

このように、ユーモアの定義づけはさまざまで果てしない。「美しさ」を定義づけることが難しいように、多くの人がユーモアを定義づけることは不可能であるという結論に達している。筆者はこれまで、過去20年間に遡って、アメリカを中心に行われてきた子供のユーモアに関する研究を調べてきたが、それらの中でユーモアは、広く柔軟に使われているが、おかしさを表す概念としてほぼ示されているようである。筆者は、子供のユーモアの研究を行う際にして、ユーモアの定義を広く柔軟に「おかしさ」「おかしさを楽しむ心」として仮説を立て、これからの過程の中で、その定義に肉づけしていきたい。

本稿は、子供のユーモアについて研究の第1回目として、1. ユーモアに関する用語、2. 日本人とユーモア、3. ユーモアと発達の諸理論との関わり、4. ユーモアの発達について文献研究を中心に行いたい。

ユーモアに関する用語を調べるのは、ユーモアとは何かをより広い角度から分析するためであり、1) 笑いについて、2) ウイット、コミック、ユーモアについて、3) absurd（不合理な）、incongruous（矛盾した）、ridiculous（馬鹿げた）、ludicrous（笑うべき）、funny（おかしい）、amusing（面白い）、mirthful（陽気な）について取りあげてみたい。

日本人とユーモアでは、日本人がユーモアのセンスに乏しいといわれている原因を探り、それを究極的には日本の子供たちに何が必要であるかということに、つなげていきたいと思う。

ユーモアと発達の諸理論との関わりでは、欧米において1970年代より注目されてきた発達の様々な分野、例えば認知の発達、社会性の発達、パーソナリティの発達、創造性の発達、道徳性の発達などとユーモアとの関連についての研究をまとめ、精神分析理論、認知論、社会的理論に絞って述べてみたい。

ユーモアの発達では、Tamashiro (1979) の示したユーモア発達段階（Piaget の認知の発達理論と Loevinger のパーソナリティの発達理論の組み合わせによる発達段階）を手掛かりにして、大まかにユーモアの発達を捉えてみたい。

## II 文 献 研 究

### 1. ユーモアに関する用語

ここでは、ユーモアをより多方面から分析するために、ユーモアと関連の深いと思われる語句を調べていきたい。

#### 1) 笑いについて

笑いとはユーモアとの関係については、ユーモアは笑いの高尚なもの、笑いをつくりだすものなど（例えば、入谷、1979；新・教育心理学事典）、さまざまな立場で論ぜられているが、笑いを知

ることはユーモアを知るための基礎を与えてくれるように思われる。ここでは、まず笑いの定義、続いて笑いの原因に着目してみたい。

笑いとは、高められた心的緊張が突然解消される時に、そこに伴う愉快的気分を表出する、生得的な人間の情緒的反応である（新版心理学辞典）。笑いを分類する方法としていろいろ挙げられるが、笑いの量的な差に着目すると、微笑、哄笑、爆笑などに分けられ、一方質的な差に着目すると、苦笑、失笑、嘲笑、お世辞笑い、朗笑などに分けられる（織田、1979）。『新版心理学辞典』の分類では、①身体の刺激（くすぐり）により自成する笑い、②うれしさの笑い、③おかしさの笑い、④社会的な象徴機能（例えば、挨拶の微笑）を持つ笑い、⑤病的な笑いが考えられる。③のおかしさの笑いは、ウィット（機知）、コミック（滑稽）、ユーモア（諧謔）に分けられるようである。

笑いがどのように生じるかについて、これまでいろいろな学説が掲げられてきたが、それらを3つに大別して論じてみたい。

#### (1)解放説

笑いは、抑圧や緊張から突然解放されることによって生み出されるという学説である。これを「余剰エネルギー説」とも言い表されるが、抑圧されたことによって生じた精神エネルギーが、一部節約されることによって生じたとする見方である（新版心理学事典）。Freud, S.によるとこの抑圧は性や攻撃などを含み、その抑圧エネルギーが一部節約される結果、笑いが生じるという（Freud, S., 1905. 懸田ほか訳、1980）。この説によれば、学校から解放された子供たちが哄笑するのは緊張が解かれ自由になったためであり、猥褻なジョークを楽しむのも蓄積された抑圧の心地良い除去である（河盛、1969）。

#### (2)優越説

笑いは、突然起こる勝利の感情や、他人より勝っているという感情の表れという説は、Hobbesによって提唱されている。他の人達よりも優れていると感じる時、自尊心が揺さぶられ笑いが生まれるのである。自己が他人より優れていると気付く時のみでなく、他人の劣等性に気付いた時（他人の失策や欠点や災難や失敗）、悦びを感じるのである。（河盛、1969）。例えば、自分の作った飛行機の方が友達のよりもよく飛ぶと、勝利の笑みがこぼれるであろう。そのような笑いは、身の周りについてのみではなく、社会の価値やタブーを含んでいる（Pollio et al., 1984）。

#### (3)矛盾説

この説は、笑いを引き起こす説明として今日最も有力で、期待や緊張していたことが思いがけない結末に直面する時、その矛盾が笑いを生み出すとしている。Kant は、笑いは緊張した期待が、突然「無」に変わる時に起こるとし、「期待はずれ」を笑いを起こす原因として捉えた（Kant, 1790. 原佑訳、1975）。Schopenhauer は、「笑いが生ずるのはいつでも、概念と、なんらかの関係においてこの概念によって思考された実在の客観とのあいだにとつぜん認められる不一致からにほかならず、笑いはそれ自身、まさにこの不一致の表現にほかならない」と述べた（Schopenhauer, A., 1819. 齊藤忍随ほか訳、1972, p.134-135.）。Bergson による、人間としての注

意深い柔軟性と、生き生きした屈伸性があるところに機械的な「こわばり」を見られる時、笑いが生じるという独創的な考え方も、この範疇に含まれるようである（新版心理学辞典）。

以上、笑いについての基本的な見解を紹介したが、ユーモアの研究を進めていく上で、笑いの心理、機能をよく理解することは必要となってくるであろう。

## 2) ウイット、コミック、ユーモアについて

ユーモアについて述べる時、ウイットやコミックとの比較を用いることがよくある。織田(1979)は『笑いとユーモア』の中で、笑いを人を刺す笑いーウイット、人を楽しませる笑いーコミック、人を救う笑いーユーモアの3つに大別している。それを参考にしながら、それぞれの特徴について述べてみたい。

### (1)人を刺す笑いーウイット

ウイット（機知）は、相手を攻撃したり反撃するための手段として、或いは相手を説得したり銚先をかわす手段として生み出される。ウイットは、頭の回転の素早さによって生み出される意外性による笑いで、笑いの中でも特に知的な笑いといえよう。

### (2)人を楽しませる笑いーコミック

人を楽しませる笑いは、人工的に喜怒哀楽の感情を引き起こし生まれるもので、突然爆発する、爆笑、哄笑、大笑いなどである。この種の笑いには、コミック（滑稽）のみならずジョーク（冗談）、ギャグ、スラップステック（どたばた喜劇）などが含まれ、娯楽性が強く、笑うこと自体が目的となっている。

### (3)人を救う笑いーユーモア

ユーモアは、人間の弱さ、人間が生きていくことのつらさ、悲しさへの同情と共感を笑いという形で示したものである。他人の弱点を温かい笑いで包み、いたわるもので、「思いやり」や「愛」に基づいている。ユーモアの感覚は、人間は完全であり、また完全でなければならないという考え方、そして失敗をせず、つねにきまじめで真剣でなければならないという考え方を否定する。人間は本来弱いものと考えることによって、起こってくる失敗や不完全さを容認するのである。自分もそういう失敗をするかもしれない、そういう弱点を持っていると認めることによって、人間的な連帯と共感が生まれ、そして他人の弱さの中に自分の持っている弱さを投影し、他人の弱点を温かい笑いでつつみ、いたわることによって自分が救われるのである。

## 3) Absurd, incongruous, ridiculous, ludicrous, funny, amusing, mirthful について

McGhee (1979) は『Humor: Its Origin and Development』の中で、「矛盾」「不合理」「馬鹿げたこと」などの概念を、ユーモアの定義の中に含めている。この定義づけは、前に述べた『Webster's 3rd New International Dictionary』の辞書での定義に近いように思われる。McGhee は、ユーモアと関連性の高いと一般に考えられている語句7つを示している (p.6-8)。

### (1) Absurd (道理にあわない、不合理な)

出来事や陳述が、真理であると知られていたり強く信じられていることに対して、道理に合わなかったり矛盾しているのなら、absurd としてみなされるのである。

(2) Incongruous (矛盾した)

ある出来事の構成要素の配列が、正常な又は予期したパターンと矛盾しているなら、その出来事は incongruous であると知覚される。McGhee はこれを、ユーモアにとって非常に大切な概念とみなしている。

(3) Ridiculous (馬鹿げた)

この語句は absurd と同義語であるが、absurd よりも深刻でないと言えよう。ridiculous は人や出来事を馬鹿にして笑うことなので、人を嘲笑したり、軽蔑したり、支配したりすることを含んでいる。

(4) Ludicrous (笑うべき)

これは、矛盾、不合理、馬鹿げたこと、誇張などの結果、笑いが生み出されることと関係した、次元の高い概念である。

(5) Funny (おかしい、面白い)

この語句は、何か変な、矛盾した、馬鹿げたことなどに気付くことを意味することからここで掲げられている語句の中で、一番ユーモラスという意味に近いであろう。しかし、ユーモラスでないが当惑することに対しても、funny は使われる。Funny は、fun からきた言葉であり、「陽気さ」「戯れ」などの概念を含んでいる。

(6) Amusing (面白い)

この語句は時々、funny と交互に使われるようだが、語に含まれる広い意味から考えると、ユーモアと関係がないように思われる。快適又は愉快さがある人の注意を捉えることが、amusing の中心をなしており、ある意味においてはユーモアも同じであるが、殆どの場合は、ユーモアがなくても entertaining (楽しい)、amusing (面白い) ということができるだろう。テレビ、劇などは、そのよい例である。

(7) Mirthful (陽気な)

Mirthful は、あたかもユーモアの同義語のように使われることがあるが、これは不適切なように思われる。たぶん、笑いが陽気さを伴っていることから、このように使われるのであろう。しかし、ユーモアによるおかしさを伴わなくても、陽気な笑いは生まれるのである。

これらの語句は、ユーモアと同義の意味を含んでいると一般的に言われているものであるが、McGhee は、amusing と mirthful 以外の 5 つの語句をユーモアと近接したものとして捉えている。Funny はユーモアに一番近いとみなされる、おかしさの意味を持つ語句であるが、このおかしさが、不合理、矛盾、馬鹿げたことによって生み出されたものが、ユーモアであるように思われる。

## 2. 日本人とユーモア

日本人は、一般にユーモアのセンスに乏しいと言われている。それは、元々中国人の林語堂によって述べられ、それが広まったためと知られているが（加島、1979）、果たして日本人はユーモアのセンスに乏しいのであろうか。またそうだとするなら、どうしてなのであろうか。

日本では『古事記』に書かれてある「天の岩戸の前で、アメノウズメの踊りを見ながら神々が哄笑した」という笑いの古い記録に始まり、笑い、狂言、笑話本、滑稽本、川柳、狂歌、落語などが、日本独特のものとして受け継がれ、親しまれてきた。故に、日本人を笑いを好まない民族であるとは、言えないようである（織田、1979）。すると、笑いを愛好する日本人がユーモアのセンスに乏しいとされる矛盾は、どうして起こるのだろうか。これについて、織田の『笑いとユーモア』を手掛かりにして考えてみたい。

1) まず日本人にはユーモアの感覚がないと言われる理由の一つとして、日本人は笑いの「場」と、そうでない日常生活とを究めて厳格に区別することがあげられる。アメリカなどでは、あらゆる場所に笑いを持ち込むのに対し、日本でもし公式の場などで笑いが持ち込まれるのなら、不真面目だとか人を馬鹿にしたとか、たちまち非難されるであろう。

2) 次に考える理由は、日本では日常生活や社会生活で極端に真面目さが要求されることである。「真面目さ」「実直さ」などが、望ましい人格として要求される。そのような性格は、ユーモアの感覚を構成する要素（第三者の目で自分自身を見る能力、物の二面性を感じ取る能力）に乏しいであろう。うっとうしい天気を「素敵な」といい、大きいものを小さく、小さいものを大きく考えるような柔軟性に欠けているのである。

3) ユーモアは、自分から自分をあえて笑いものにする試みであるともいわれるが（小此木、1985；河盛、1985）、日本人にとって笑いものにされるのは、耐えられないことなのである。日本人は小さい頃から、恥を知るように躾けられたため、恥をかくことの報いとして世間から笑われることに非常に敏感である。

以上のことをまとめてみると、日本人にユーモアが乏しいと言われる理由として、1) 日本では笑いの「場」と、そうではない日常生活とを厳密に区別すること、2) 日本人に望まれる性格として「まじめさ」「実直さ」などが挙げられるが、そのような性格は、ユーモアに不可欠な物事の二面性を眺める能力や柔軟性に乏しいこと、3) 恥をかくことに敏感である日本人は、ユーモアに必要な自分をあえて笑いものにするのが難しいことなどが挙げられる。

### 3. ユーモアと発達の諸理論との関わり

ここでは、ユーモアと発達の諸理論との関わりについて、これまでなされてきた研究の中から、精神分析理論、認知論、社会的理論の3つに焦点をあてて述べてみたい。

#### 1) 精神分析理論

子供のユーモアの研究の出発点、または基本を与えているものは精神分析理論である。Freud, Sはその著『機知と無意識との関係』の中で、ユーモアは性的または攻撃的衝動として禁じられて

## 奥 田 倫 子

いたものを、社会的に認められうる形で一時的に解放するものであり、不安や悩みの種に対処するのを助けると述べている (Freud, S., 1905. 懸田ほか訳、1980)。彼のユーモアについての理論は、精神分析学者らによって受け継がれていったが (Krogh, 1985)、この理論では一般に、ユーモアは緊張や抑圧から解放し、不安や恐れを避けるのを助けるものであることが述べられている (例えば McGhee, 1979)。このことから、クラスルームで子供が先生の話が退屈であると、隣に座っている子供をくすぐったり、つついたりすること、また、注射が怖いといって泣き叫ぶ子供に対して、医者はいしかめつらをするよりも、むしろ微笑んでその子供がリラックスできるように笑わせること、よく乳児に好まれる「いないいないばあ」なども、この緊張と解放が土台となっていると筆者は考える。「いないいないばあ」では、「いないいない」で隠れることによってどこにいるのか、いつ現れるのかという緊張が生まれ、「ばあー」で、ほっとした気持ちや解放感また思いがけなさによって驚きや面白みが生まれるのである (寺内、1985)。要するに、権威、緊張、悩み、不安、恐れというもののからの出口として、問題解決の手段としてユーモアが使われているように思われる。

## 2) 認知論

認知論とユーモアとの関係は、ユーモアの研究において、現在最も注目を浴びている研究領域である。ユーモアの認知論者は、予期した概念や活動のパターンが矛盾することがユーモアの始まりであると述べてきた (McGhee, 1979)。この分野での第1人者である McGhee (1976, 1979) は、ユーモアの理解、鑑賞、創造は Piaget の認知発達の段階と一致した序列を持っていることを示してきた。それによると、子供の認知のレベルに適したユーモアの挑戦を受けると、そのユーモアをよく理解することができるが、それを理解できる認知のレベルを越えていたり、また達していない場合には、そのユーモアが理解できたり、興味や面白さが見出されるのは難しい。要するに、簡単に理解できたり非常に難しいことよりも、理解するのに最適な努力の量を必要とするユーモアの方が面白さがあり、理解した時に得る喜びは大きいのである。この考えに従ってゆくと、大人と子供との何が面白いのかという認識が違うのは、大人と子供との認識のレベルが違うからであり、また、感覚期にいる子供と具体的操作期にいる子供とでは、何を面白いと思うかについては違って来るであろう。

## 3) 社会的理論

1) の“精神分析理論”で述べたように、ユーモラスな雰囲気は抑圧や緊張を和らげ、快適、リラックスした空気を作る。またさまざまな制約から解放し、自由になるのを助けることができる。そしてユーモアは、人が環境や世界に溶け込むのを助けるのである (Aho, 1979; Pollio, 1984)。このように考えると、ユーモアは社会生活の中で、人と人との関わりの中で、重要な役割を果たしている。

ユーモアは、対人関係やグループの密着性を強めるという重要な役割を持つ。例えば、Ransoh-



offによると、思春期の女性の性的ジョークは彼女達を発達不安から解放し、グループでの結合力を高めるためであり、また学童期の子供たちがジョークを仲間と分かちあうのは、その面白さを分かちあうのを喜ぶためであるという（Masten, 1986より孫引）。Ziv（1983）によると、笑いは伝染し、喜びを増加し、ユーモアによって生み出された楽しいムードを強化するという。以上のことから、ユーモアは人と人とをより結びつけるために用いられ、また他人の影響を受けやすいことがわかる。

上記のことから、ユーモアが対人関係において大きな影響を及ぼし、また受けていることが分かったが、ユーモアと社会性との間に何らかの関係があるのだろうか。これまでさまざまな研究が、ユーモラスな人の行動特性について調査を進めてきた（例えば、McGhee & Lloyd, 1982; Ziv, 1983）。Ziv（1983）は、青年期におけるユーモラスな人は、そうでない人よりも仲間に人気があるといってきた。Masten（1986）は、10～14歳の子供たちのユーモアとコンピタンスとの関係について研究を進めていった。それによると、ユーモアを生み出したり、理解すること、及び笑いなどを含めたユーモアの能力を表している子供たちは、効果的にクラスに従事し、注意深く、協調性があり、応じやすく、生産的であると教師により評価され、また人気のある、社交的な、幸せな、良いアイデアを持つリーダーであると仲間にみなされていることが分かった。

さて、乳幼児と社会性との関係についてはどうであろうか。McGheeとLloyd（1982）は、就学前児の行動特性とユーモアの発達との関係について示した。笑いの頻度とユーモアを起こす行動と言語が、自由遊びの間観察され、行動特性（社会的な遊びに費やした時間、身体や言語上の攻撃性、人の注意をひこうとすること、仲間の真似をすること、おしゃべり、エネルギーのレベル）との関係が調べられた。この研究で、就学前児のユーモアのセンスと自由遊びでの行動特性との関係は見出されなかったが、学童初期の子供たちのユーモアのセンスは、先行経験（就学前期での行動特性）により予想されることが分かった。子供のユーモアのセンスを予想する最も大きな要因は、社会的遊びの活動に費やした時間であることが示されたが、社会の相互作用、社会的わかちあいや強化の中で、よりユーモアを生み出し、また他の人が生み出したユーモアを笑い、ユーモアのセンスを高めていくことが考えられたのである。このことはPollio（1984）らの研究においても言えそうである。これによると、笑いは3～5歳児を通して5%のみ一人遊びの時に起こり、残りの95%では、平行、あるいは協同遊びの時に起こるという。以上のことからユーモアは他の子供たちとの遊びに活発に参加している子が、より発達しているようである。

ユーモアと創造性との関係も、最近盛んに行われている研究である（例えば、Rouff, 1975; Ziv, 1983）。McGhee（1979）は、幼児のファンタジーは、ユーモアを創造する助けとなることについて述べている。好奇心があり、目新しさを楽しむ子供たちはファンタジーにより従事しがちであり、彼らはファンタジーと共に快い経験をしているので、拡散的思考やユーモアを創造する技術を高めることができるというのである。幼稚園児における彼の研究で、創造的な園児がそれほど創造的でない園児よりも、より自発的でふざけたことが発見されている。Ziv（1983）も同様に、青年の創造性のスコアがユーモラスな雰囲気大きく左右されていることを実験によって明

らかにし、教育におけるユーモアの適用を強調した。

以上、精神分析理論、認知論、社会的理論の3つの立場から、ユーモアとの関係を見てきた。これらを簡単にまとめてみると、精神分析理論では、ユーモアを緊張、抑圧などから解放し、悩みや不安に対処していく手段として捉えている。また認知論では、認知発達の中で、特に概念の発達がユーモアの理解、鑑賞、創造と関連していることを示している。社会的理論では、ユーモアがパーソナリティ、対人関係、社会性、創造性に、大きな影響を及ぼし、また受けていることが考えられている。

#### 4. ユーモアの発達

ユーモアと発達の諸理論との関係を見てきた結果、発達が段階から段階へと移り変わっていくにつれ、ユーモアのタイプも段階から段階へと移っていくことが推論できる。McGhee は Piaget の認知発達の理論を用いてユーモアの序列を説明した（例えば、McGhee, 1979）。この認知発達の理論と、そして Loevinger (1976)の自我の発達の理論を結合し、その中でユーモアの発達を示したのは Tamashiro (1979)である。彼による“発達段階とユーモアのタイプ”は表1のようである。これを手掛かりにしながら、ユーモアの発達段階について具体的に述べてみたい。

表1 発達段階とユーモアのタイプ

自我の段階*	認知の段階**	有 力 な 関 心	ユーモアのタイプ
前社会／象徴的	感覚運動的知性	自分を自分以外のものと区別すること	くすぐり、身体の接触
衝 動 的	前 操 作	体の機能、運動のコントロール、刺激、言語能力	身体の機能、おどけ、スラップステック（どたばた喜劇）、ナンセンスな表現、歌
自 己 保 護 的	具 体 的 操 作	自我の境界線を確立し、守ること；有利さと支配を得ること；問題を避けること	上記に加えて：*** practical joke（いたずら、わるさ）、からかい、支配的なユーモア
同 調 的		社会に認められること、社会のグループに属すること、他人を喜ばすこと	上記に加えて： 伝統的なジョーク、なぞなぞ、言葉遊び、下品なジョーク、人種民族に関するジョーク
良 心 的	形 式 的 操 作	自己定義づけ又は自己評価の信条や価値；コミュニケーションへの関心や他の人達への影響力	上記に加えて： 独自の良い性質のユーモア、軽蔑のユーモア、社会的皮肉

\* Loevinger (1976)によるもの（傍点は筆者によるもの）

\*\* Piaget (1963)によるもの（原文では parallel cognitive stage とあるが、parallel を省略する）

\*\*\* “上記に加えて”は、前段階でのユーモアのタイプに付け加えてという意味である。

資料出所：Tamashiro, R. T. Children's humor: A developmental view, *The Elementary School Journal*, 1979, 80 (2), 70.

1) 前社会、象徴的段階 (Loevinger)/感覚運動的知性段階 (Piaget)

この時期では、乳児は世界の中の物体を不動なもの、不変のものであることを学習し、シンボル化することができ、他人と区別された自分というものを定義づけることができる。この期間笑いの原因となるものは、くすぐりや身体の接触である (Tamashiro, 1979)。McGhee (1979) は生後18ヶ月の子供は毛布をあたかも哺乳瓶のようにつかみ、その“ふり”を楽しむと述べている。これはユーモアの芽生えとして考えられている。この種の活動は5歳ごろまでよく見られ、初期のユーモアは、子供が矛盾した出来事や関係を生み出すことだと言われている。

2) 衝動的段階 (Loevinger)/前操作段階 (Piaget)

この段階で、子供は一つの対象物においてさまざまな性質を概念化することができる。ゆえに概念の矛盾はユーモアの材料と考えられている (Tamashiro, 1979)。この時期にいる子供は、スカートをはいた男の子を見て可笑しいと思うであろうし、ぬいぐるみの熊にお父さんの帽子がかぶせてあるのを見て笑うであろう。

またこの段階は自己中心的性質を持ち、子供は刺激によって支配され、刺激によって知らず知らず自分を定義づけている。子供は刺激を操作、コントロールすることに関心を持ち、特に排泄などの体の機能を習得するのもこの時期である。よって身体に関してのジョークは、笑いの源となっているのである (Tomashiro, 1979)。例えば、おしり、おっぱいといった衣服によって隠されている体の部分についてのジョーク、しゃっくり、げっぷ、おならなどの体の作用によって生まれる音は笑いを誘うであろう。そのようなジョークは dirty joke (下品なジョーク) と呼ばれ、聞いている人にショックを与えたり、驚かせて仲間と一緒に面白がるため、また身体をコントロールしきれない不安感から解放されるために用いられるという (Cohen & Rudolph, 1977. 森上訳、1984)。

さらにこの時期の特徴として、言語が習得され、言語の構造に気付き始めることによって言葉遊びを楽しむようになることが挙げられる。ナンセンスな言葉、節、歌などに興味を示し、簡単ななぞなぞを楽しむようになる。さらに攻撃的な刺激と言語の習得とによって、単純なからかいの言葉が生まれてくるであろう (Tamashiro, 1979)。

3) 自己保護段階 (Loevinger)/具体的操作段階 (Piaget)

ここでは刺激に支配されていた前段階から、自己への興味や欲望へと移り、自己と外部との間に境界線を引き、守ろうとする。「それは私のせいじゃない」と外部を非難し、あるいは外部をコントロールすることによって自己を守ろうとする。また、概念の複数の意味を理解できるようになり、だんだんユーモアは、大人の模倣の始まりとして変化し、複数の意味を持つ駄洒落やジョーク、抽象的な概念に基づいたジョークを理解し始めるのである (Tamashiro, 1979)。

4) 同調的段階 (Loevinger)/具体的操作段階 (Piaget)

この段階において、子供は社会のグループの中で、まず自分の家族、そして友達の中で自己を確立する。そして自分自身を個人としてでなく、社会のグループの中での一員としてみなし、グループに適合することを学ぶようになる。ゆえにグループの中で人々とうまくやっていくことに、

## 奥 田 倫 子

社会に認められることに高い価値を見出すようになる。このことによって、この段階の子供は、伝統的な、型にはまったジョークを楽しむという値向を示す。なぞなぞ、言葉遊び、下品なジョークなどがこの中に含まれるであろう。またこの時期、グループの中で正しくありたいという欲望が高まるため、人種民族に関してのジョークやからかいなどが生まれてくる (Tamashiro, 1979)。

## 5) 良心的段階 (Loevinger)/形式的操作段階 (Piaget)

形式的操作期にいる子供は、複数の可能性を考えたり自分自身の行動がどのように肯定的、否定的な結果を及ぼすかを考えることができるようになる。前段階では、グループに適合することに重きをおいていたのに対し、この段階では、個人の評価や価値を重要視し自己を定義づけることができる。そして自分や他の人達との考え、価値、性質、動機の違いを認識することができるので、真の対人関係における成熟が見られるようになる。自己の価値感や良心の感覚が、この時期でのユーモアの源となり、社会を非難したり皮肉るジョークも見られるようになる (Tamashiro, 1979)。

## III 結 語

今回は、子供のユーモアの研究の第一回目として、研究を行うに際して、ユーモアとは何かを調べ考察し、またこれから日本の子供たちのユーモアを研究していくために、日本人とユーモアとの関係を探っていった。そしてユーモアと発達の諸理論との関わり、ユーモアの発達について、アメリカを中心とした欧米の文献を手掛かりに述べてみた。

前にも触れたが、ユーモアとは何であるか定義づけるのは非常に難しく、最後にはどういう人生観を持つのかに係わってくることなのかもしれない。しかし、子供のユーモアを分析、探究することによって、大人の視点からしか捉えていなかったユーモアというものに、新しい形を与えてくれるであろう。

ユーモアは「思いやり」「柔軟性」「創造性」などと大きな関わりをもつ。織田や河盛は、日本人はユーモアの必要条件である、物事の二面性を捉えたり、第三者の目から見る柔軟性、心の余裕に欠けていることを指摘している。もしそうであるとするなら、そのような環境で育っている日本の子供たちに、何が必要なのか、ユーモアの研究によって見えてくるのかもしれない。

ユーモアが子供の発達と大きく関わりを持つことから、子供のユーモアを知り理解することは、子供の発達を捉える上での一つの示唆を与えてくれるに違いない。そして、今まで理解できなかった、或いはネガティブに捉えていたかもしれない子供のユーモアに、素晴らしい内なる可能性や力を見出せるかもしれない。さらには、大人も子供と共にユーモアを楽しむことによって、相互の絆を強めることができるのではないだろうか。

最後に Lloyd (1985) のユーモアの教育的意義についての研究の中から引用してみたい。

「ユーモアは、重荷を軽くし、釣り合いを修繕し保つことができる。そして、特に子供が何か明るい光を見ることを可能にする」。

引 用 文 献

- Aho, M. L.: Laughing with children. **Childhood Education**, 1979, **56** (1), 12-15.
- あらかわそおべえ著：角川外来語辞典 第2版、角川書店、1977.
- Bergson, H.: LE RIRE, 1900. 林達夫訳笑い、岩波書店、1976.
- Cohen, D. H., & Rudolph, M.: Kindergarten and early schooling. New Jersey: Prentice-Hall, 1977.
- 森上史郎訳、幼児教育の基礎理解 上巻 幼児理解とクラスの経営、教育出版、1984.
- Dunn, F.: Interest factors in primary reading material. Teachers College Contribution to Education, No. 113. New York: Teachers College, Columbia University, 1921. As cited by Jalongo, M. R.
- Children's literature: There's some sense to its humor. **Childhood Education**, 1985, **62** (2), 109-114.
- Freud, S.: Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten, Verlag Franz Deuticke, Wien, 1905.
- 懸田克躬ほか訳、機知—その無意識との関係、フロイト著作集 第4巻 人文書院、1980.
- 平井信義：ユーモアの発達（第1報）—幼児期におけるおどけ・ふざけの意義について—、大妻女子大学家政学部紀要、1985, **21**, 41-52.
- 入谷敏男：「ユーモア」の構造と機能、ユリイカ 特集=ユーモア、青土社、1979, 70-75.
- Jalongo, M. R.: Children's literature: There's some sense to its humor. **Childhood Education**, 1985, **62** (2), 109-114.
- Kant, W.: Kritik der Urtheilskraft, 1790. 原佑訳、カント全集、第8巻 判断力批判、理想社、1975.
- 加島祥造：ユーモア引用句辞典の話、ユリイカ 特集=ユーモア、青土社、1979, 106-115.
- 河盛好蔵：エスプリとユーモア、岩波書店、1969.
- 河盛好蔵：日本人のユーモア、人生読本 ユーモア、河出書房新社、1985, 12-17.
- Krogh, S.: He who laughs first: The importance of humor to young children. **Early Child Development and Care**, 1985, **20**, 287-299.
- 黒 豹介：ユーモアとは……、人生読本 ユーモア、河出書房新社、1985, 96.
- Lloyd, D. I.: What's in a Laugh? Humour and its educational significance. **Journal of Philosophy of Education**, 1985, **19** (1), 73-79.
- Loevinger, J.: **Ego development**. San Francisco, California: Jossey-Bass, 1976.
- McGhee, P.E.: Children's appreciation of humor: A test of the cognitive congruency principle. **Child Development**, 1976, **47**, 420-426.
- McGhee, P. E.: **Humor: Its origin and development**. San Francisco: W. H. Freeman and Company, 1979.
- McGhee, P. E., & Lloyd, S.: Behavioral characteristics associated with the development of humor in young children. **The Journal of Genetic Psychology**, 1982, **141**, 253-259.
- Masten, A. S.: Humor and competence in school-aged children. **Child Development**, 1986, **57**, 461-473.
- 夏目漱石：文学評論、江藤淳、吉田精一編、夏目漱石全集、第15巻、文学評論他、角川書店、1975.
- 日本大辞典刊行会編：日本国語大辞典 第19巻、小学館、1976.
- 西尾 実ほか編：岩波国語辞典、第3版、岩波書店、1985.
- 織田正吉：笑いとユーモア、筑摩書房、1979.
- 小此木啓吾：精神分析からみたユーモアと笑い、人生読本 ユーモア、河出書房新社、1985, 111-117.
- Piaget, J.: **The psychology of intelligence**, Paterson, New Jersey: Littlefield, Adams, 1963.
- Pollio, H. R., Lounsbury, K. R., & Bainum, C. K.: The development of laughing and smiling in nursery school children. **Child Development**, 1984, **55**, 1946-1957.
- Ransohoff, R.: Some observations on humor and laughter in young adolescent girls. **Journal of Youth and Adolescence**, 1975, **4**, 155-170. As cited by Masten, A. S. Humor and competence in school-aged children. **Child Development**, 1986, **57**, 461-473.
- Rouff, L. L.: Creativity and sense of humor. **Psychological Reports**, 1975, **37**, 1022.

奥 田 倫 子

- Schopenhauer, A.: Die Welt als Wille und Vorstellung, 1819. 2. Aufl., 2 Bde., 1844, Erster Band. 齊藤忍随ほか訳、第1巻 表象としての世界の第1考察: 根拠律に従属する表象: 経験と科学との客観、ショーペンハウアー全集 2. 意志と表象としての世界 正編 (I)、白水社、1972.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会: ランダムハウス英和辞典、小学館、1985.
- Tamashiro, R. T.: Children's humor: A developmental view. **The Elementary School Journal**, 1979, 80 (2), 68-75.
- 寺内定夫: ほほえみと大空のおもちゃ、国土社、1985.
- 梅津八三ほか監修: 新版心理学事典、平凡社、1985.
- Webster's New International Dictionary of the English Language**. 3rd ed. Unabridged. Springfield, Mass.: G. & C. Merriam Company, 1961.
- Wissler, C.: The interests of children in the reading work of the elementary school. **Pedagogical Seminary** 5 (Oct. 1898): 523-40. As cited by Jalongo, M. R. Children's literature: There's some sense to its humor. **Childhood Education**, 1985, 62 (2), 109-114.
- 矢野蜂人: 英文学の特性、松柏社、1969.
- 依田 新監修: 新・教育心理学事典、金子書房、1983.
- Ziv, A.: The influence of humorous atmosphere on divergent thinking. **Contemporary Educational Psychology**, 1983, 8, 68-75.